

酪農家が減ると、どんなことが起こるのだろう？

私たちの日常のために
酪農家が守っているもの



雇用や地域の コミュニティ

酪農業は獣医師、飼料・機械メーカー、削蹄師、酪農ヘルパー、検定員など多くの雇用の受け皿でもあります。また、地域の自治体運営・コミュニティを支える役割を担っている酪農家も少なくありません。酪農家は地域の生活基盤、そして活力を守っています。



土地 (食料生産基盤)

一度、耕作放棄地になった場所で新たに作物を生産するには、多くの時間と労力、コストがかかります。そのため、離農者の土地(草地、畑、水田)を既存の酪農家が引き受け、牧草や飼料用とうもろこしなどを生産することも。土地の荒廃を防ぎ、食料の生産基盤を維持しています。



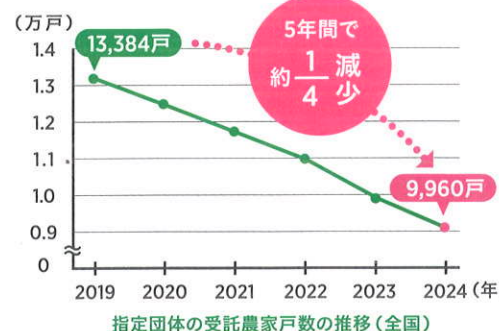
災害時の食料供給 地域循環型農業

各地域に酪農家や乳業工場が分散することで、災害で道路が寸断された際も地域内での牛乳・乳製品の供給が可能に。家畜の病気が発生した場合にも、生産基盤の維持を可能にし、リスク分散につながります。また、牛ふん堆肥は野菜・米の畑に還元でき、化学肥料の削減に役立ちます。



今、起きていること

全国の酪農家が、
ついに1万戸を切る事態に (2024年10月時点)



ものすごいスピードで酪農家が減っている！

全国の指定団体の受託農家戸数(※1)は2019年の段階で13,384戸ありましたが、2024年10月に1万戸を切り、9,960戸まで減少。5年間で約4分の1が減少する勢いで離農が進んでいます。特に新型コロナに端を発した「令和の酪農危機」では、1年で約700戸(7%)もの酪農家が廃業に追い込まれました。新規就農で酪農を始める人はいるものの、離農のスピードは著しく、生産基盤をカバーできるまでには至っていません。

離農の背景には何が？

以前から酪農家の高齢化で離農が進んでいましたが、直近では経営環境の悪化が離農を加速させています。背景には、円安・原油高・ウクライナ情勢の影響を受けた生産コスト上昇、生乳販売や副産物(牛を販売して得られる)収入の減少などが。現在のような経営状況では老朽化する建物・機械の更新や再投資が難しく、営農継続を断念する酪農家が増えています。

国産生乳が不足する！？

生乳の国内生産は年間727万トン(2024年度)ですが、酪農家の減少により2028年度には695万トンまで減少が進むことが予測されています。一方で、世界の人口増は進み、牛乳・乳製品の消費量もアップ。環境規制などの観点から生乳生産量はそれほど伸びない見込みです。つまり、このままでは日本の生乳不足を輸入で補うことが簡単にはできなくなる可能性もあるのです。



私が牧場を営む地域には、現在2戸の酪農家しか残っていません。地元の農協には集乳ルートを組み替えるなどして対応してもらっていますが、これ以上全国の酪農家が減って生産基盤が崩れてしまえば、コンスタントに皆さんの元に牛乳・乳製品をお届けするのも難しくなってしまう。安定的な牛乳・乳製品の消費に協力していただくことで、私たち酪農家も安心して生産を続けられます。ぜひ、全国の酪農家を応援してください！

酪農家からのメッセージ

今後の生乳の安定生産・供給の難しさについて訴えました。会見後は有楽町駅前で酪農家8人が、牛乳・乳製品の危機に関するポイントを紹介するチラシと各地域の牛乳を配布。未来の世代にも国産の牛乳・乳製品を届けられるよう、持続可能な価格での製品購入による酪農家への応援を呼びかけました。

東京・有楽町で
チラシと牛乳を配布しました！

未来の世代にも
国産の牛乳・乳製品を！



全国の酪農家の皆さん。重苦しい雰囲気にならず、諦めず、この難局を一緒に乗り越えていきましょう！

吉田牧場・吉田英子さん
(埼玉県・秩父郡小鹿野町)

※1 全国に10団体ある指定団体(生乳を酪農家からまとめて集荷し、乳業メーカーに必要な量を販売するなど生乳の需給調整を主に担う組織)を通じ、生乳を出荷している酪農家。